

sollen, will は wollen と語原を等しくするものであるが, sollen が「……すべきである。」と云った「義務」や「命令」等, 主語以外のものの意志を表わす事を知るならば, I shall hear from him tomorrow. You shall have an answer without fail. Where shall he put your luggage. における shall に共通した意義を理解する事ができる。You shall……における shall が話者の意志を表わすと説明しただけでは, Shall you be in if I call in the afternoon? の疑問文の場合の用法や, Who wins his love shall lose her, who loses her shall gain. に用いられる運命的必然をあらわす shall の用法は不可解なものであるだろう。

これらの例はほんの一例にすぎないし, 又英語の理解にドイツ語やラテン語が不可欠であるとも限らない。しかし, 言語学的にはなほだ親しい関係にあるこれらの国語を教える場合に, 相互比較研究がいかに有効であるかは, これを実際に行つて始めてわかるであろう。

我々はもちろん英語のためにドイツ語を教えるものでもないし, その逆でもない。一国の文化は独自なものであるが, 一方相互の文化的交流関係を無視して歴史や社会を理解できるものではないが, 言語の場合においても同様で, 二者の間に明らかな近親関係がある場合これを無視して, 別々のものとして扱うのは愚かであるし, かたくななセクショナルリズムにおちいるのは無教養のそしりをまぬがれない。

ゲーテの言葉に, 「外国語を知らなければ自国語はわからない。」という意味の言葉があるが, これと同様に一つの外国語しか知らないものは, その外国語がよくわからないのである。外国語の研究は実用上の問題であると同時に教養——単なる心の装飾という意味ではなく, 心を cultivate するという意味であるが——の問題でもある。これからの日本人には広い世界的視野が必要であるが, 特に指導者においてそうである。

さきに同族語としての英語やドイツ語, ラテン語等の関係を強調したが, 全然語族的に無関係な英語とシナ語, 英語と日本語の関係等においても, それ等相互の単語の意義や, 文法的機能は一見無関係のように見えるが, 人間の思考や感情の動きという点で相通するものがある。言語を比較研究し, その差異と, 類似に気づく事は, いわば自己の思考を客観的にながめ, それを深く, 又合理的に再検討する事であつて, 教養の第一歩である。単に外国語の単語をたくさん知っているとか, 会話がたくみだという問題とは違ふ。

以上外国語の学習の重要な事, 第二外国語の必要を述べたのであるが, 問題はそれが必要か否かという事ではなく, いかに実行にうつすかの問題であつて, 実際にそれが行われるような体制をととのえる事が先決問題である。

Gerund 用法上の一考察

鏑 木 光 朗

英語における gerund は古くは participle と形においても, 意味においても区別があつたのであるが, 現在においては, 形において両者間に何らの区別がない。即ちいずれも動詞の原形 + ing の形を有する。しかし, 意味においては, 依然として区別がある。即ち

gerund は名詞的意味を有し, participle は形容詞的意味を有する。

それ故, gerund を verbal-noun, participle を verbal-adjective と呼ぶこともある。

さて, gerund は名詞的意味を有するものであるが, participle と同様, 形は動詞の原形 +ing であり, 動詞の意味も強く含有している。このことは gerund が目的語を後に支配したり, having+ 過去分詞(動詞)の如き完了形を有したり, being+ 過去分詞(動詞)の如き受動形を有したりすることによっても分るのである。即ち gerund は, 名詞的要素と動詞的要素とを共に含んでいるということができると思う。ただそのいずれの要素が強いかは個々の gerund の形を見なくては決められない。Curme は gerund は古くは verbal-noun であり, 名詞的要素が強かったが, 現在では動詞的要素が強くなって来たたと述べている。(Syntax p483)

しかしながら, 学校文法において gerund と云い, 我々が問題にするのは前述の如く動詞的要素を多分に持ち, 意味だけが名詞的になったものである。即ち例を挙げると次の如きものである。Seeing is believing. (主語及び補語) / I began seeing the sights. (目的語) / I am fond of teaching. (目的語) He gave up his favourite pastime—reading. (同格語) 以上の各文においては, gerund は名詞的意味を持つと同時に, 名詞的役目(文法上の役目)を有している。即ち文の主語, 補語, 目的語になっている。更に動詞的役目も有していることは, 個々の意味を考えれば分るのである。

これらは問題なく gerund の普通の形であるが, 次に gerund の前に何らかの語(word)がついて, gerund を形容している場合について考えて見よう。

普通 gerund の前には名詞の通格 (common case) 又は代名詞の所有格 (genitive case) がつく。これを gerund の主語という。例えば, 次の如き文である。

即ち You must acknowledge his being careless. / He is sure of my succeeding. / I dont approve of my son doing that. 名詞が gerund の主語になる時も, 元来所有格 's が用いられたが, 段々と主格の形になり, 通格が用いられるに至ったのである。

さて, 前述の如く, gerund の前につく語(名詞, 代名詞)は gerund の含む動詞の動作, 状態の主体となるものである。それ故, 先に gerund の前につく語(名詞, 代名詞)を gerund の形容語と云ったが, 正しくは形容語ではないのである。それでは, gerund の前につく形容語はないのであろうか。このことは後述することにする。前に gerund は形は動詞であるが, 意味は名詞的であり, 名詞と同じ役目(文法上の役目)を有する。即ち, 文の主語, 目的語, 補語になると述べた。それ故, 次に実際の例文を挙げて, 以上のことを説明しようと思う。

Ⅰ 文において主語として用いられた場合

- (1) The buildings of the Egyptians show that they had great skill.
- (2) Seeing is believing.
- (3) Seeing involves the interpretation by the brain of the image.
- (4) Too small an opening allows insufficient light to enter.
- (5) When we are asleep, the breathing is less rapid.
- (6) A tired feeling come on.
- (7) Sleeping and Waking are due to changes in the blood.

以上の例より考えると、gerund が主語として用いられた場合は名詞的要素が強く感ぜられる。

(1)の場合、building は元来 gerund であったが、現在では殆んど普通の noun と同様に用いられているので問題はない。又(6)の feeling も同様で、この場合「感情」と云う名詞の意味である。それ故、feeling の前に形容詞 tired をつけている。

更に(4)、(5)の場合も同様である。それでは、その他の(2)、(3)、(7)の場合はどうであろうか。これらの場合は gerund の前に冠詞や形容詞をつけないので、純粹の名詞とは考えられない。普通の gerund である。従って gerund 本来の意味(～すること)を有する。但しこの場合は(3)において seeing を「見ること」と云う代りに「視覚」と云い、(7)において sleeping and waking を「眠ったり目覚めたりすること」と云う代りに「睡眠や目覚め」と云っても何ら差支えないし、寧ろその方が意味が明確である。即ち、(2)、(3)、(7)においても、gerund は名詞と殆んど同じ意味を有していると考えて良いと思うのである。

文の主語とは、文の主体となるものであり、述語の持つ陳述に対する主体をなすもの、つまり行為者又は行為物であるから、当然名詞化したものになるのではないかと思う。

以上、gerund が主語に用いられた場合は名詞化されたものであると考えて良いと思う。さて先に gerund が本来有する名詞的意味と云ったが、gerund “seeing” が「見ること」と云う意味を有する時は、この gerund は “see” 「見る」と言う動詞の意味を有しているのであって、名詞の意味を有するのではない。云い換えると、seeing は動詞 “see” の名詞的意味を有する gerund である。名詞的意味と、名詞の意味とは異なっているのである。所が、gerund が更に意味上転じて名詞と同じく考えられ、いや実際に名詞としての品詞を有するようになった building, feeling, thinking, liking, opening, breathing, etc の如き場合は、最早や gerund としての機能を失って、普通の名詞としての機能を有するに至ったと考えられるのである。

さて、次に gerund が目的語として用いられた場合を例を挙げて説明しよう。

II 文において目的語として用いられた場合

- (1) They left records of their doings.
- (2) They obtained more knowledge by copying what they saw.
- (3) Would you mind explaining it to me ?
- (4) He never thought of giving up.
- (5) I finished the work though it was not to my liking.
- (6) He could not avoid pitching into the well.
- (7) None know the feelings of my heart.

以上の文の gerund はいずれも目的語となっている。文に於て目的語となるということは、他動詞の目的か又は前置詞の目的語になるかいずれかである。形容詞の目的語になる場合もあるが、稀である。上例において(1)、(2)、(4)、(5)の場合は、いずれも前置詞の目的語であり、その他の例はいずれも他動詞の目的語となっている。さてこれらの場合においても又、前のIの場合と同じことがいえる。即ち、上例中、(1)、(5)、(7)の場合の gerund はいずれも純粹なものではない。元来、gerund であったが、最早や名詞と考えると良いものである。

(1), (7)の場合は、形の上からも明確である。従って、これらの場合を除いて(2), (3), (4) (6)の場合について考えて見ようと思う。其のいずれの場合にも、gerund 本来の名詞的意味(～すること)を有している。(4), (6)の場合、各々「断念」「投入」という名詞の意味を用いても意味は通ずるが、矢張り「断念すること」「投入すること」と解して、動詞としての意味を用いた方が明確である。(2), (3)の場合のように、gerund が後に目的語を支配する場合は名詞と同じ意味ではない。

gerund の動詞的要素を強く有することになる。これは当然で、gerund が後に目的語を支配する以上、そのgerund は他動詞としての機能を果すからである。以上gerund が他動詞の目的語となった場合も、前置詞の目的語となった場合も、要するに、文において目的語として用いられた場合は、そのgerund が名詞化した場合((1), (5), (7))を除いては、動詞としての要素を強く有すると云えると思う。

それでは次に、gerund が補語となった場合について例を挙げて説明しようと思う。

III 文において補語として用いられた場合

- (1) Seeing is believing.
- (2) The General Assembly is a sort of big town meeting of the world.
- (3) The retina is the inner living of the rear part of the eyeball.
- (4) His forte is painting desolate scenery.

以上において、(2), (3)の場合を除いて、(1), (4)の場合は、本来の名詞的意味(～すること)を有する。(4)の場合は後に目的語を支配しているので、動詞としての意味が強い。(2), (3)の場合は前のI, IIにおいて説明したと同様、gerund の名詞化したものである。それ故、gerund が補語として用いられた場合も、動詞的要素を強く有すると考えられる。以上gerund が果す文法上の役目について述べたのであるが、要約すれば、gerund が名詞化した場合は別として、主語になる時は、名詞化した場合と同じ意味を有し、目的語や補語となる時は、名詞的意味(～すること)を有すると考えられる。

所で、今この処において問題となるのは、現代英語に用いられているgerundの一形態が、ある場合には名詞的意味(～すること)に用いられ、他の場合には名詞と同じ意味に用いられている場合である。以下、例を挙げると次の如き場合である。

The main object of newspapers is the informing of every day occurrence...(A)

(A)において、gerund 'informing' は未だ完全に名詞化したものではない。即ち、他のgerund 'building, liking, thinking, etc' の如きものとは違うのである。なぜなら、このinforming は後にevery day occurrence なる目的語を支配することにより、informing にはなお他動詞としての役目が含まれているといえる。この場合前置詞ofは、意味上、of以下のものをその前の他動詞(又はそれに類似するもの)の目的語とする目的格を表わすofといえる。従って、building, liking, thinking, etc が, 'to build' (建てること), 'to like' (好むこと), 'to think' (考えること) という意味から転じて、「建物」「好み」「思想」なる純粹名詞の意味になった場合とは違うのである。にも拘らず、(A)においては、informing はtheなる定冠詞が前につき、普通の名詞と何ら形において変りはないし、意味においても、the informing の代りにthe news, 又はthe report と置き代えても何ら変りはない。それでは今、(A)においてgerund 'informing' の含

む他動詞の意味を強く表現しようとするれば如何なる文になるであろうか。

此處に第二の文が考えられる。即ち、

The main object of newspapers is informing every day occurrence.…… (B)

(A)と比較すると、informing の前の定冠詞と、その後の of とを欠いている。そして直接 Be 動詞と結びついて補語の役目を果している。

この場合、informing は純粹の gerund であり、「報道すること」という名詞的意味である。every day occurrence を直接目的語とする他動詞の役目を果しているのである。それと同時に、Be 動詞の補語となっているのであるから、名詞としての役目も果しているのである。先に (A) においては、informing は後に目的語を支配するので、他の名詞化した gerund 'building, liking, thinking, etc' とは異なるといったが、形の上から of genitive が後に来るので名詞と同じに考えて良いと思うし、又、意味上名詞と考えて良いと思う。

(A) において informing は純粹に名詞化したものではないが、その前に冠詞をつけ、後に of genitive を有することにより、名詞化されたものと考えて良いであろう。なぜなら若し (A) において、informing が普通の gerund の有する動詞的要素を強く有するならば、定冠詞も又、of なる前置詞も必要のない (B) の文となるからである。

従って、(A) における the informing of ~ は gerund 'informing' の名詞化と考えると良いと思う。

元来、動名詞は、動詞の名詞化したものより發達したものであるから、抽象名詞としての意味を有していたのであり、それが次第に動詞としての意味、機能を有し、今日に至っているのである。その發達過程を簡単に示せば次の如くなるであろう。即ち、

- (1) 冠詞がついていて目的資格を示す of が伴う形 : the procuring of money.
- (2) (1)の冠詞が落ちた形 (of はそのまま) : procuring of money
- (3) (1)の of が省かれ、目的語と直接結びついた形 (冠詞はそのまま) : the procuring money.
- (4) 冠詞も of もつかず目的語と直結した形 : procuring money.

(1)は最も古い形ではあるが、現在も用いられている。之が前述の (A) の場合であり古く逆行した形を取っていると云えるのである。

(2)は Chaucer あたりから用いられ出しているようであるが、現在では殆んど廃用に帰している。

(3)は(2)とほぼ同時期に發生した形のようなのであるが、初期近代英語 (Early ModE) では盛んに行われたにも拘らず、現代では余り用いられない。

(4)は動名詞の代表的な用法として現用されているものである。この(4)が前述の (B) の場合であり、動名詞の動詞的要素を持つ場合と云える。

gerund の發達過程は以上の如くであるので、以上の (A) の場合は明らかに古い gerund の形に逆行するものであるが、之は生物学上の所謂再演 (Recapitulation) が行われていると云えるのである。以上、gerund の持つ名詞的要素と動詞的要素が、実際の用法において如何に表われているかを見て来たのであるが、gerund は元来 verbal-noun であり、現在も名詞と同様な機能を有している。それ故、普通の名詞と同じであると考えるはいけな。名詞的役目と同様に、動詞的役目も次第に強く有するようになって来たからである。

このことは今迄述べて来たことで良く分ることと思う。しかし、今日 gerund の純粹名詞化したもの、例えば、building, liking, thinking, etc の如きものの数も多くなり、又今迄述べた如く、gerund が主語になった場合や、補語や目的語になった場合も（この場合は特にその前に定冠詞や形容詞を附し、後に of genitive をつける）名詞化する傾向が生じて来たことを考えると、gerund 本来の有する名詞的要素が強くなって来たと思われる。しかしこのことは早急には決められない問題である。gerund は現在、名詞的要素と動詞的要素の両方を有しているので（此の両要素の強さは大体に於て等しいと考えられる）非常に便利ではあるが、一面、名詞とも動詞ともつかない半端の状態にある。且つ Participle とも意味上異なるにしても、形の上においては全然区別がつかない。これらのことから考えると、gerund の含む動詞的要素を全然失って、名詞的要素のみを強く表わし、普通の名詞と同じに取り扱い、云い換えれば、gerund 本来の名詞化の傾向が次第に生じて来たと考えられるのではないかと思うのである。

随筆「恩師のことなど」

〔石川、黒田、寺西、青木、大塚、渡辺、福原、西脇, Hornby, 教授〕

高 宮 孝 治

東京高師の英語科教授、石川林四郎先生の亡くなられたのは、昭和16年の夏休み中のことと記憶している。Concise の編集者として中学（旧制）時代から、その名声だけは、なじみ深かった先生はなんでも中国地方が九州地方の出張先で不慮の病禍に遭われたものらしかったが、当時、即ち16年といえば私が雪多い北陸の田舎中学から、はじめて上京して東京高師の英語科に入学した年である。沢山の有名な教授が東京高師にはおられたが田舎者の私には当時はそんな事は一向知らず、唯石川先生だけは、中学時代に机上の友だった Concise の関係から、畏敬の念でその講義を受けたものである。もっとも亡くなられるまで、入学以来僅か一学期間だけで、何等大きな影響を受けたというわけでもないし、又講義の細い点も、使った Text の名前すら忘れて終った。然しその名声の割に一向、大教授らしくない、どちらかといえば風采の上らない素朴な田舎人のような先生の、半ば白くなった頭髪と短く刈りこんだ口鬚の温顔が思い出される。体つきも小柄で、話し振りも決して雄弁でなかった。唯同先生については、16年後の今日でも、はっきり思い出されることは、Pronunciation のことである。非常に発音の喧しい先生で、講義などにおける Reading などの全体としての発音は別に日本人離れのした fluent なものと私には思われなかったけれど、一語一語の発音の正確さは、流石 Concise の編集者だけあって見事なものであった。

いつだったか Text 中の 'Washington' の発音について、私共の誤りを訂正されて「ウォシントン」ではなく「ウオシン」ときって「グ」は勿論鼻音となって鼻にかけるが「トン」の「ト」は、はっきり出さないで口を閉じて鼻から出す、stocking などの例もあげられた。何しろ私は発音のルーズな田舎中学出なので、そういったことは強く頭に残り、その後奉職しても stocking など、先生のまねをして教えたものである。